

## 「新たな時代を迎えて」

日本赤十字社診療放射線技師会 会長 安彦 茂

平成が終わり、新しい時代「令和」が始まる。日本赤十字社の医療施設は、平成30年に山形・奈良・宮崎を除いた日本の全都道府県に合わせて92施設があったが、兵庫県の柏原赤十字病院が県立病院に統合されて廃止されるため令和元年には91施設に減少する。令和は、各都道府県の地域医療計画に合わせて施設の統廃合が進む時代になるだろう。

さて、平成を医用放射線領域で振り返ってみると、X線写真はアナログからデジタルに変わり自動現像機があつという間になくなった。このX線写真のデジタル化は、その後フィルムからモニター診断に替わる大きなきっかけとなった。この結果、院内に沢山あったシャウカステンが液晶モニター取って代わり診察室の風景も様変わりした。消化管検査は、内視鏡の技術の発展により、注腸検査や胃がん検診がX線から内視鏡に変わる大きな転換期を迎えた。MR検査は、撮影の高速化とDWIのような新しいシーケンスの開発により、脳神経領域だけでなく全身の検査に応用されるようになった。また、乳房X線撮影の画質向上と乳がん検診の普及、PET検査が実用化された他、放射線治療では癌細胞に多くの放射線量を照射し、周囲の正常組織にはできる限り少ない量の放射線を照射する方法が開発され高い治療効果と少ない副作用を実現した。また、特に大きな技術革新としては、ヘリカルCTの開発とそのマルチスライス化があげられる。CT検査で従来できなかった多方向の精細な画像が、非常に短い撮影時間で取得可能になり、通常診療だけでなく救急医療においても不可欠なものとなった。さらに画像処理技術の発達により、マルチスライスCTで得られた大量の画像データを使って3D画像を作成することができるようになり、最新医療技術の発展に大きく貢献した。これらの技術の変遷は、特に救急診療における診療放射線技師の役割を大きく変えることになった。今回の会誌では、この救急医療について特集を組んでいるので一読していただきたい。